

六花

3

俳句雑誌りつか
2012 (平成24年)
Cover Dress of Little Bird



琴

梅

山田六甲

こ
こ
そ
ば
ゆ
く
梅
の
め
し
べ
を
嗅
ぎ
に
け
り

ち
散
る
と
て
も
通
は
む
梅
の
枝^し
垂^た
る
る
は

ふ
深
き
天
覗
き
ぬ
梅
の
枝
の
中

か
貸
杖
を
漢
は
拒
み
谷
の
梅

ば
ば
り
ば
り
の
髪
梳
く
指
や
梅
の
影

に
西
風
の
夕
を
き
ま
り
に
梅
香
る

ほ
彫
り
深
き
顔
忘
れ
し
よ
梅
し
ろ
し

ひ
火
に
く
べ
る
枝
集
め
を
り
梅
の
番

を 押 寿 司 を 梅 の 下 に て 共 に せ し
こ 腰 ま で の 雪 に ひ る ま ず 梅 探 る
せ せ ま り く る 崖 に せ り 出 す 梅 一 枝
よ 夜 の 梅 を 嗅 ぎ に 来 て ゐ る 気 配 か な
う 梅 よ り も 白 き も の な く 夕 暮 る る
め 眼 を 洗 ふ ご と し よ 梅 に ま ば た く は
の 野 仏 の 簪^{かざし} に し あ る 梅 の 花
は 播 磨 灘 眼 下 に 梅 の ま つ り か な

な 菜を山と積んで売りぬる梅が宿
る 瑠璃色の木膚に梅を嗅ぎにけり
じ 地滑りの痕へ隣れる梅畑
な 無しとせむことのあるこれ梅暮るる
し 死をもつて人は終らず梅紅し
と 遠ざかり遠ざかりゆくか梅の顔
て てのひらに雑魚をいただく梅の宿
は 斜交ひの道をちかみち梅の山

る 類似せる句を誉めてあり梅まつり
な 泣きべそをかいてをりけり梅の月
わ 僅かでも匂へば梅に戻りけり
す すり足で降りても滑る梅の山
れ 礼に礼かはせる梅の一会かな
そ 足跡を辿れと匂ひ梅ましろ

新日本古典文学大系40（宝物集） 菅原道真の歌

「東風ふかばにほひをこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれぞ」より

狸汁人間たるを忘じけり

貝森 光洋

たぬきじるにんげんたるをぼうじけり かいもりこうよう

両の耳五指もて包む雪囲い

黄えや舞え風花この世を舞い尽くせ

手の届く節圍と決めて寝正月

人間になれると言ひ張る雪達塵

臭みを消すために手間暇掛けてやつと蒟蒻のような食感だというのだから、猫の肉に似ているのだろう。人間を忘れて獣にならなければ食べられたものではないのか。獣と思えないほどに絶妙な味なのかはこの句からは判らない。

とある奈良の寺で昔は狸に歯ごたえが似ている蒟蒻を狸肉に見たて、野菜などを入れ味噌仕立の精進料理へと変化したそう。つまりは、「タヌキ汁」は「コンニャク汁」に化けてしまったと言う。光洋さんらしい味付けの句。

玉あられ雲の切れ目をゆく鴉

梶浦玲良子

たまあられくものきれまをゆくからす かじうられいりようし

はやばやと小鳥は鶴に秋の空

落葉焚く匂ひほとけのうすまぶた

仏手柑の持らこたへたる落暉かな

しほみゆく冬たんぽぽへ川曲がる

霰は雪の結晶に雲の微水滴がたくさんついて出来たもの。霰はたしかに玉を成しているがその霰の美称が玉霞。多くはにわか降ってたちまち止む。その玉あられが地面に跳ねだした。思わず上空を仰ぐと雲の切れ目が明るく、鴉が飛んでいるのが眼に入った。地面の白い玉あられと上空の鴉の黒。雲の切れ目の明るさなどの遠近感が急に冷えを感じさせたのだ。

ちなみに玉霞は霰小紋といって小紋の名にも用いられる雅語（雅言）。

豆撒きの鬼役外へ星の風

市川伊團次

まめまきのおにやくそとへほしのかぜ いちかわいだんじ

豆撒きの豆炒る匂ひありにけり

豆撒きの鬼を追ひ出す父の影

窓明かり内より聞こゆ鬼は外

平成や孫には孫の鬼は外

節分の夜に「福は内、鬼は外」と唱えながら鬼を追う。邪気を払いながら、農産物などの豊穰を祈る予祝行事でもあった。家庭における節分の鬼役はおおかた父親。その父親めがけて、子どもたちははしやぎながら鬼の豆を打ち付ける。父親は「退散退散」と悲鳴を上げながら外へ逃げ出す。外に闇が広がるが、天空には冴え返った星。その星から風が吹いて来るように、豆撒きで興奮しながら今の幸せを心地よい。漢は星を仰ぎながら今の幸せを味わっている。伊團次さんには「七夕や仕事帰りに風のあり」という秀でた句がある。その感覚はいささいかも衰えていない。ことりもことある毎に「七夕」の句には追いつけないとよく言っていた。今回も七夕に匹敵する作品。

雪 卿 集

電気浮子

松本文一郎

秋水の細きを集め水車かな
火の恋し波のまにまに電気浮子
文化の日デカンショ節の同期会
目白来る低き籬に見え隠れ
文化の日皇居始点のウォーキング

寝正月

貝森光洋

両の耳五指もて包む雪囲い
舞えや舞え風花この世を舞い尽くせ
手の届く範囲と決めて寝正月
人間になれると言ひ張る雪達磨
狸汁人間たるを忘じけり

せつじゆしゆう
雪樹集

凍
滝
高瀬
博子

滝凍てて氷のオブジェ展げたり
滝凍てて滝の響きを封じ込む
氷瀑の裾アイゼンで蟹歩き
氷瀑の滝壺がぼと靴を噛む
凍滝のすべてを護り磨崖仏

水
仙
筒井八重子

寒雀わが足音にさつと散る
水仙のつぼみ膨らみ初めにけり
臘梅を一枝手折りきたりけり
曇り来て小雪まじりの雪となる
寒肥を丁寧にまく庭の木々

蛍雪譚 六甲

秋水の細きを集め水車かな

松本文一郎

秋になって河川の水が乏しくなった。その水をかき集めるように引いた水車はゆっくりではあるが意外な力強さで廻っている。「細きを集め」て水も積もれば山?というのを水車に言わせたのがいい。現代の水車は水のエネルギーを粉ひきや米搗きなどに利用するのではなく、昔の懐かしさを醸し出すための飾りになったのが多い。しかし山峡では、今でも発電や蕎麦の引きに使われたりして現役で働いている物も少なくない。掲句の場合はそのような現役の水車を詠んだのである。

火の恋し波のまにまに電気浮子

電気浮子は夜釣りに使う。釣りに集中していると様々なことが頭をめぐるが、目だけは灯りのついた浮子に集中している。秋の漣が立って浮子はその波に揺られて浮き沈みしている。浮いたときは明るく沈んだときは暗い。その繰り返して明るさと暗さのプラスマイナスは零になるのではなく、波の間に沈んだ暗い方の積み重ねが知らず知らずのうち心に入り込んでくる。ふと、肌寒さがつのつて火の気が恋しくなった。「夜釣り」は夏だが「夜焚火」(夏)をしなくなるように夜の水辺は冷える。その実感を読者も共有する。

六花集

悴	め	風	冬	く	秋	落	単	白	初	平	窓	豆	豆	豆
み	ぎ	に	晴	れ	篠	葉	線	息	時	成	明	撒	撒	撒
て	む	寄	や	な	へ	踏	の	を	雨	や	か	き	き	き
口	れ	る	高	ゐ	つ	む	列	か	礎	孫	り	の	の	の
を	ば	一	炬	の	づ	栗	車	け	石	に	内	鬼	豆	の
も	う	塊	の	海	く	り	枯	て	大	は	よ	を	炒	鬼
て	し	世	煙	を	佐	し	葉	願	き	孫	聞	追	る	役
ゆ	く	にあ	直	さ	保	手	の	ひ	な	の	こ	ひ	ひ	外
く	コ	り	に	ぶ	路	帖	ほ	を	西	の	ゆ	出	あ	へ
コ	ッ	隙	落	る	の	ポ	か	絵	馬	鬼	の	す	り	星
ッ	プ	か	葉	冬	冬	ケ	乗	馬	に	は	鬼	父	に	の
プ	酒	な	立	落	紅	ッ	ら	書	大	は	は	の	け	の
酒	風	つ	暉	暉	葉	に	ず	く	寺	外	外	影	り	風

藤生不二男

平居 濤子

市川伊團次